

# 休日**向上**計画

佐藤 透<sup>1)</sup>

Toru SATOH

1) 医療法人社団涼風会佐藤脳神経外科  
〒729-0104 広島県福山市松永町 5-23-23



## かわざかな水槽

### はじめに

最近ちょっぴりはまってる、かわざかな（淡水魚）の生け捕り、その後の水槽飼育の楽しさを、みなみなさんにご紹介いたします。

### かわざかなたちとの出会い

カラフルなパーマークのオイカワ、いかつい顔のカワムツ、銀色斑点のズナガニゴイ、一本すじの通ったムギツク、すらり清ました青銅色の若アユ、岩陰に潜むオヤニラミ、川底をあさるカマツカとズジシマドジョウ、流れに食いしばって耐える岩肌のヨシノボリなど（図1）。冷水の水槽を、ところ狭しと泳ぐ彼らの姿に見入り、しばし時を忘れる。

子どものころ、小川や田んぼ、用水路や溜池に出か

けては、メダカ、ドジョウ、フナ、ドンコ、鯉、果ては、雷魚やうなぎ、イモリやザリガニなどよく採って帰ったもんだった。庭池の水換えて、バケツ2杯のザリガニを捕まえて、大なべて塩茹でし、醤油味で堪能したことを覚えている。そういえば、ドンコもウシガエルも、いろいろと食った記憶がある。

ふるさとの川に戻って、川の狭さに驚き、子どもらとおそろおそろ網を入れてみる。もうおらんかな？と思いきや、カダヤシ、子ブナ、川エビもそこそこに採れた。おっ、妃ブナも1匹混じってるじゃん。

川の中流・上流には一味違ったいろいろなかわざかなたちがまだまだ生息している。ダム予定地でのモトクロス観戦に出かけた際、暑さしのぎに川に入った。何気なく探った川底に、見たこともない金兜のドンコっぽいのがいた（図2）。カマツカとの出会いだった。



図1 オイカワ、カワムツ、ズナガニゴイ、ムギツクのみなみなさん



図2 頭をのぞかせ、隠れたつものカマツカのつがい



図3 黄色いパーマーク・青銅色ボディの若アユたち



図4 キラリと動く擬似眼のオヤニラミ

浅瀬を流れに抗して潜っては、砂地に埋もれたカマツカを探す。泳ぐ彼らの逃げ足は鯉のごとく速い。しかし、砂地に潜った彼らの姿は、少々間が抜けて滑稽である。砂をかぶって目玉の部分だけを覗かせて、しっぽの先が枯れ木のように見えている。しめしめ、にんまり。隠れてるつもりの奴さんを、そのまま一瞬で押さえつけて素手でゲットする。すぐ隣に2～3匹隠れたつもりの仲間が見つかることもある。

すぐそばをびゅんと横切った奴がいた。何だあれって？ そのまま石場に逃げ込んだ。手を滑り込ませて、指先に相手を感じ取る。そろりそろりと石を動かして指を進める。岩間に手を入れて、手のひらに獲物を囲い込んで、やんわりと指に挟んで、逃がさないように引っ張り出す。ズナガニゴイじゃん、やったあ。手のひらに動き回る獲物は、何とも言えない、なつかしい感触、これって病みつきになってしまう。

## 投網打ち

うわ物、なか物のさかなは、すばしっこくて、網ですくわしてくれない。岩場に逃げ込んだとしても、手掴みするのは到底無理である。釣りもいいけど、無傷で生け捕りするなら、やっぱり投網だなあ。投網打って

雑魚の生け捕りじゃ。何軒か漁具ショップを廻ったけれど、手ごろな投網の現物は置いていない。そこはやっぱり通販だね。糸の素材から、網の目合、節、裾目数、重量から選べる。ワカサギ・若アユ狙いで、3.0分、18節×1,000目、4.0kgを選んだ。

届いた投網を担いで、早速庭で練習。興奮を抑えながら、それっ一網打尽と網を放した。しかし、網は開かず、振り回した錘が頭上に降ってきた。危ねえ、これじゃ、魚が捕れどころか、怪我するね。早速、ネットの投網講座でコツを学んで、あとは子どもと競争で練習に励んだ。左肘・左手・右手で手取りして、回転と遠心力を使ってパアッと花火を咲かせる、あの三角投法をマスターした。といっても子どものほうがやっぱりチトうまいなあ。網の補修も糸の結び方も、外科結びだけじゃなくていろいろとあるもんだ。

からっから天気が続いた、虎の子の休日。かわざかなが捕れると聞くと、道具一揃い携えて、子どもら乗っけてすぐに出かけた。龍頭の滝・山野峡から芳井にかけての小田川は、絶好のポイント。黄色いパーマークが出る前の若アユ(図3)、顎棘のアカムツ・カワムツ一家、岩間に潜むムギツクの群れ、きらりと動く擬似眼のオヤニラミ(図4)、深緑黄色の鳴き魚ギギ



図5 エメラルド・アクアマリン・ルビーに輝く宝石, オイカワくん

などなど。なかでも、投網の裾袋で飛び跳ねる、婚姻色のオイカワは、陽光を浴びて、エメラルドとアクアマリンにルビーをちりばめたような、凜とした宝石の輝きを放つ(図5)。

これこれ、やっぱり自然のものは、最高じゃなあ、と見入っていると、後ろからしわがれた声が出た。ひと目で一杯入っとなるとわかる爺さん。あんたらあ、まだ網打っちゃあいけんでえ、鑑札もとるんかあ？ 漁協が廻るとるけえ、捕まるでえ。遊魚券あとで買おう思うて、なかなかおらんこともあるけえ、試しにちょっと打ってみとったところじゃけえ、と屁理屈で凌いだ。爺さん、採れたてのうなぎを自慢げに見せて、ふらふらしながら魚籠を提げて、軽トラをぶりぶり唸らせて走り去った。そっちのほうこそ捕まるでえ、警察に。

## 水槽を眺める

ごっそり捕えた獲物は、生け簀網からクーラーボックスに移して、エアポンプを廻して持ち帰る。恐る恐る蓋を開けて、あ～あ、いっぱいこと“うとおとる(=died)”。なまんだぶつなまんだぶつ。試行錯誤、



図6 仲良しシマドン(ズジシマドジョウ)とカマドン(カマツカ)

体表の擦れからくる感染の予防に抗生物質(エルバージュ®)を混ぜて殺菌し、コンビニで氷袋を買って、そのままクーラーボックスに突っ込んで、5～10℃に冷却する。魚の動きも酸素の消費も抑えられて、このところ生存率は99%が確保されている。

かわざかなたちは、1,200×450×450 mmの上部ろ過水槽に、冷水機・ポンプを組み合わせ、みんなでいっしょに混泳させている。水温は、18℃に設定しておく。水草も育つし苔も生えず、エサも少なめで、魚の消耗も少なく快適である。水質の管理は、あれこれ試してみても、人の技量では難しい。結局のところ、ろ過バクテリアの力を借りて、食物連鎖の管理をすることで解決した。今では、日々の餌やり、週一の水替え以外、ほとんど世話なしで、自然界に近い水環境を得ている。

はにかみ屋のかわざかなたちは、照明に慣れると、デジカメ撮影の美しいモデルになってくれる(図6)。時代の流れのなか、命の尊さと生まれ育つ環境の大切さを思いやりながら、子どもらといっしょに水槽を眺める。い～いひと時である。